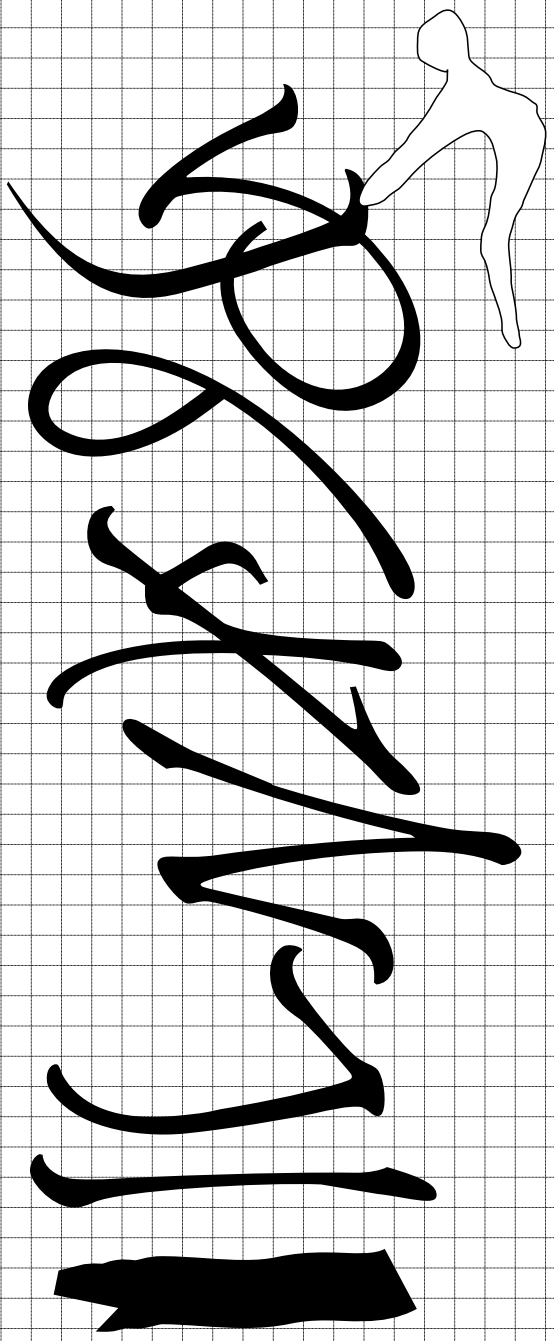
令和四年度（二〇二二年度）工芸史研究会活動報告　二〇二三年四月二十一日　工芸史研究会運営委員会

工芸史研究会



令和四年度（二〇二二年度）

活動報告

1、活動報告
2、今年度の要改善点および来年度の目標
3、年間活動記録
4、収支報告

工芸史研究会

令和4年度（2022年度）
工芸史研究会活動報告
2023年4月21日
工芸史研究会運営委員会

工芸史研究会（以下「本研究会」）は、設立2年目となる令和4年度、以下の活動を行った。

1、活動報告

初年度に行なった研究会のフォーマットを基礎として、計5回の研究会、及び部会1回を開催した。いずれもこれまでに会員自身が続けてきた研究の経過報告や、展覧会の準備を通した調査研究の共有であり、質疑応答では各分野から活発な意見交換が行われた。2年目ではあるが、「工芸」の各分野をまたぎ研究を共有する、本会の目的を達成することができた。研究発表に関しては、新型コロナウイルスの感染拡大への懸念、さらにさまざまな地域に住む会員の参加を促すため、引き続きオンラインでの開催を基本とした。また今年度より、研究会に関する告知および発表報告をFacebookでも行なった。

加えて新たな試みとして、来年度以降の機関誌発刊の実現に向け検討を重ねた。

昨年度作成したフライヤー、ウェブサイト等を用いた会員の勧誘を進め、2023年4月現在、会員数は39名である。

詳細は以下に述べる。

（ア）研究会

〔第1回〕

■題目：**「澤部清五郎とその周辺―画業における図案制作の位置づけについて―」**
■発表者：神野有紗（千葉県立美術館）
■日時：2022年6月5日（日）19時30分～
■会場：オンライン開催（Teamsにて開催）
■概要：浅井忠に師事し、洋画・日本画・デザインなど多分野にわたって活躍した澤部清五郎（1884～1964）について、その画業における織物図案や室内装飾の仕事の位置付けに注目して発表した。

〔第2回〕

■題目：**「肥前磁器の色絵の材料と技術」**
■発表者：水本和美（東京藝術大学）
■日時：2022年7月8日（日）20時00分～
■会場：オンライン開催（Teamsにて開催）
■概要：発表者は、近世都市江戸の中心地にあたる江戸城跡、有楽町一丁目遺跡、神田淡路町二丁目遺跡の発掘例を調査し、明暦の大火（明暦3（1657）年）で罹災した一括性の高い陶磁器資料群に関する調査研究を進めてきた。本発表では「肥前磁器の色絵の材料と技術」を中心に、これまでの研究成果について発表した。

〔第3回〕

■題目：**「近代横浜における輸出漆器について―横浜芝山漆器を中心に―」**
■発表者：鈴木愛乃（神奈川県立歴史博物館）
■日時：2022年9月11日（金）19時30分～
■会場：オンライン開催（Teamsにて開催）
■概要：本発表では実際に輸出された漆器の作例を紹介しながら、特に横浜において製作された装飾性の高い漆器・横浜芝山漆器を中心に、その製作と受容の様相を探った。

〔第4回〕

■題目：**「小川三知のステンドグラスについて ―宮越邸3作品の考察」**
■発表者：篠崎鈴（学習院大学大学院美術史専攻修士課程）
■日時：2022年11月11日（金）19時30分～
■会場：オンライン開催（Teamsにて開催）
■概要：小川三知はアメリカ留学前には東京美術学校で日本画を学んでいたこともあり、その作品の中には、窓枠という画面の中で余白を大きく取った構図のものや、花鳥をモチーフにしたものなど、西洋のステンドグラスにはあまり見られない、日本絵画を彷彿とさせるデザインの作品が多くある。本発表では、小川三知の最高傑作とも評される青森県の宮越邸の3作品に着目し、宮越邸の仕事が彼の制作活動の中でどのような存在として位置するのかを考察した。

〔第５回〕

■題目：**「江戸時代中期以降の陶磁器補修に関する調査報告」**
■発表者：巖由季子（大阪市立東洋陶磁美術館）
■日時：2023年1月14日（土）19時30分
■場所：オンライン開催（Google Meetsにて開催）
■概要：壊れた陶磁器を漆で補修し、金粉や金箔で加飾する金繕いは、
広く知られているにも関わらず創始時期や展開の詳細に関して不明な点も多い。
発表者は金繕いや関連技術及び補修痕をもつ陶磁器の受容について調査することで
その一端を明らかにしようと試みており、本発表では近年行った調査結果を報告した。

（イ）部会

会員主体でより気軽に研究経過の発表、意見交換を行なうことを目的とし、会員の発案により部会の区分を設けた。

〔第１回〕

■題目：**「中世から近世初期の能装束に見る金属箔織物の使用について―岐阜県関市・春日神社伝来の能装束を例に」**
■発表者：玉井あや（東京藝術大学大学院美術研究科芸術学専攻博士後期課程）
■日時：2023年3月12日（金）　19時30分～
■会場：オンライン開催（Teamsにて開催）
■概要：関市・春日神社伝来の能装束の調査をもとに、「側次　紺繻子地花鳥文様銀襴」を主に採り上げ、
金銀襴など金属箔織物の日本中近世における使用例について報告した。
今回は新たな試みとして、調査写真をみながらの座談会形式とし、多岐にわたる意見交換を行なった。

（ウ）機関紙について

研究会の機関紙について、全体の方向性、及び執筆要項について協議を重ねた。

【会誌概要】（仮）

創刊号は未査読とし、論考（研究ノート）や発表報告、担当展覧会の報告、所属先の取り組みの紹介、自身の研究分野の研究史・展望のコラムなどを想定。

・第1号は2023年秋～冬出版を目標とする。
　会員ほか、書店、美術館博物館、図書館、大学等への配本予定
・編集：工芸史研究会
・出版：南方書局
・デザイン：明津設計（浅田農）
・年1回発行予定
・発刊目的：（1）当会の活動記録をアーカイブし、会員の発表の場をつくる
　　（2）工芸研究の総合誌として、分野を跨ぎ知見・研究動向を共有する

2、今年度の要改善点および来年度の目標

○ 機関紙の刊行

・寄稿者及び出版社と連携をとりながら、秋冬の刊行を目指す。
・創刊号の編集をプロトタイプとして、今後持続可能な編集会務の形を検討する。

○ 研究会の運営方法の改善

・各回の研究会に関しては、会員からの申出をもとに、発表の方法について運営側と発表希望者で相談を重ね、望ましい形での実現を図ってきた。ただし会員からの企画提案フローが確立されておらず、提案しにくいという声も寄せられた。以上を踏まえ来年度は、アンケートフォームの導入などを検討し、会員の企画提案における心理的障壁を低減し、より活発な研究発表を促すことを目指す。
・オンライン会議ツールを基本の発表場所としてきたものの、各ツールのアップデートによる既存サービスの変更、ブラウザ版、app版等の各人の環境による違いに対応しきれない点があった。今年度はこれまで不確定だったオンライン会議ツールを、有料版の導入などを検討し確定させる。

○ 運営委員会における会務の効率化

・ボランティアによる運営である以上、運営委員会の会務に過度な負担感が生まれないようにすることは喫緊の課題である。会務の適切な振り分けを行い、運営に関わる会務を属人化しないツールの導入を促進する。

○ 会員の拡充

・チラシの配布や新たなSNSツールの活用により広報を行い、さらなる会員の拡充を図る。

○ 工芸関連の学術情報共有の活発化

・LINEオープンチャットを主として、展覧会、シンポジウム等、工芸に関する情報を積極的に共有し、会員同士も発信しやすい雰囲気作りを行なう。

3、年間活動記録

2022年	4月 2日	運営委員会MT（活動報告、会費について）
	5月 1日	運営委員会MT（第1回研究会の事前打合、今年度の活動）
	6月 5日	**【第1回研究会】**
	6月 11日	運営委員会MT（会費・会計、フィールドワーク企画、第2回研究会の事前打合）
	7月 8日	**【第2回研究会】**
	7月 31日	運営委員会MT（第2回研究会の反省会、デザイン費、Facebookの活用について）
	8月 28日	運営委員会MT（会費明細、第3回研究会の事前打合）
	9月 11日	**【第3回研究会】**
	9月 25日	運営委員会MT（第3回研究会の反省会、第4回研究会の事前打合、機関紙の発刊）
	10月 23日	運営委員会MT（第4回研究会の事前打合、南方書局を交えた編集会議）
	11月 3日	運営委員会MT（機関紙の概要、方向性について）
	11月 11日	**【第4回研究会】**
	11月 26日	運営委員会MT（機関紙の概要、方向性について再考）
2023年	1月 14日	**【第5回研究会】**
	1月 23日	運営委員会MT（機関紙の内容・スケジュールについて、部会開催について）
	3月 12日	**【第1回部会】**
	3月 19日	運営委員会MT（機関紙の寄稿、講演会の開催等について）
	4月 21日	運営委員会MT（令和4年度活動報告、令和5年度活動について）

4、収支報告

収入の部			
	会費（計34名）	学生会員（6名）	9000
		普通会員（28名）	56000
		寄付額（4名）	8000
収入計			73000
支出の部			
	委託費	・メインビジュアル ・活動報告書 ・各種広報画像 ・WEBサイト	60330
	消耗品費	・会議にかかる手土産	4903
	通信運搬費	・フライヤー送料	250
支出計			65483
差引収支			7517

2022年度工芸史研究会運営委員
廣谷妃夏、橋詰果歩、泉山真悠、光武晴香、金昭延、金慧周、青木つづり